
【論考】

『ドゥルーズ 流動の哲学』と『ドゥルーズ 解けない問いを生きる』を読み直す ——合理性の観点から

得能 想平

二〇一九年から二〇二〇年にかけて、日本におけるドゥルーズ研究のメルクマールをなす、宇野邦一『ドゥルーズ 流動の哲学』、(以下『流動の哲学』)と檜垣立哉『ドゥルーズ 解けない問いを生きる』(以下『解けない問いを生きる』)の二著が改訂再版された⁽¹⁾。本稿は、これを機に改めて両著作に見いだされるドゥルーズ哲学の大枠と合理性の位置づけに関して論じてみたい。

ここでの合理性とは、社会が成立するために不可欠な言語的なものと大まかに定義しておきたい。元々二〇〇一年と二〇〇二年に相次いで出版された二著は、ドゥルーズ哲学における「感覚されることしかできないもの」としての差異を中心的主題の一つとして扱っており、この意味でドゥルーズの反合理主義的な側面を強調する著作である。われわれは後にこのような議論を差異の感性論として確認することになるだろう。ただし、両著作はこの差異に対する合理性の位置づけについての重要な示唆も行っているように思われる。本稿は両著作が示すドゥルーズ哲学の大枠を素描したのち、これらの示唆を拾い上げることで、ドゥルーズ哲学における合理性の位置づけについても考えてみたい。

二著の解釈には、差異の感性論以外にも共通点がある。それは、人間主体を、非観念論的なものと見なし、一種の実在的な領野としてとらえる考え方である。この意味で、両著作は、マルティン・ハイデガーやモーリス・メルロ＝ポンティに見られる場として主体の考え方を、ドゥルーズも一定程度継承するものと見なし得ると言える。ただし、これらの共通点にも関わらず、二著には相違点も多い。われわれはこのことについても触れることになるだろう。

第一節では宇野の解釈が、触発と表現行為に関わる「平面」として個体を捉えるものであること、さらに合理性に関する示唆を内在と絶対という二つの観点から見いだせることを確認する。第二節では、檜垣の解釈が「卵」における未決定性と環境の対として「私」を捉えるものであること、そしてこの対のおのおのが別の仕方でも合理性に関わることを確認する。最後にこれらの議論をまとめつつ、ドゥルーズ哲学における合理性の位置づけの問題に

ついて改めて考えてみたい。

第一節

われわれは、『流動の哲学』のキーワードの一つとして「触発」を挙げることができる(宇野 2020:7)。「触発」のモチーフはこの著作に頻出する。例えば、宇野はドゥルーズの「わかりにくさ」を問題にしつつ、次のようにドゥルーズの思想を特徴づける。

けれども、おそらくドゥルーズのわかりにくさは(そしてわかりやすさは)、その思想が哲学として展開されながらも、哲学とはあくまで異質なものに触れていることからくる。長いあいだ思考の理想的モデルを与えてきた哲学が、そのような傾向そのものによって哲学を他の認識のうえに君臨させ、かえってみずからを内部に閉ざしてきたとすれば、ドゥルーズは哲学を外部に開くために哲学するという逆説的な試みを最後まで続けたからである(宇野 2020:38)

ドゥルーズの思想は、「哲学」でありながらも「哲学とはあくまで異質なもの」に関わり、「哲学を外部に開く」ことにこだわる思想である。言い換えるならば、宇野は、ドゥルーズの思想を外部からの触発を肯定するものと特徴づけるのである。

外部からの触発を肯定するとは具体的にどのようなことだろうか。例えば、『差異と反復』のドゥルーズの到達点は、次のように記述される⁽²⁾。

反復、理念、強度をめぐるドゥルーズの思索は、そのように「感覚するのが難しいが、感覚するしかない」差異に直面し、そのような差異にしたがい、そのような差異を解放しようとする試みやエティカそのものである。だからこそ、言語について考えるとき、あるいは身体について、イメージについて、欲望について、あるいは社会、歴史、政治について考えるときも、決してドゥルーズは、差異と反復、理念と強度に

について、このように深めてきた思索を手放すことがないのだ (宇野 2020:160)

ドゥルーズの思想は、「[感覚するのが難しいが、感覚するしかない] 差異」を肯定し、この差異の観点から、他のすべての主題を再考するものと捉えられる。要は、外部からの触発を肯定するとは、合理性に帰着されない感性を認め、それを議論の出発点に据えることである。われわれは、このような特徴づけを差異の感性論と呼ぶことができるだろう。

興味深いのは、『流動の哲学』の結論部において、差異の感性論が表現行為と結びつく点である。宇野は、ラース・フォン・トリアー監督の映画『ダンサー・イン・ザ・ダーク』に影響されたものと付け加えつつ、次のように述べる。

たとえば、映画の中で、救いようのないほど不幸な、無一物の虐げられた女が、歌い始め、踊り始めるとき、それは夢想と音楽の中に、不幸の代償を求めたわけではない。あらゆる悲しみや悲惨が、音楽の中で歌い上げられて消化されるといってもいい。悲しみが歌の素材であるように見えても、歌うこと、その運動、振動、飛躍がじかに「喜び」を原理としていなければ、そもそも歌うことなどできない。

それは実に奇怪な飛躍だけれども、世界のざわめき、騒音、人々や機械や列車の些細な動き、光と闇の交替が突然あらゆる障壁を超えて共振し合い、自然と人間の闘が震えだし、すべてが渦を巻いて、ひとりの女の心身を駆け抜け、その周囲の時空を巻き込んでいく。悲しみが喜びに変化したわけでも、悲しみが喜びのバネになったわけでもなく、世界、風景、音、光、物質と精神、感情と思考、内部と外部が、あらゆる否定性や固着や闘を超えて、通じ合い、交感し合い、共振し合っている。

そのとき、そこには喜びしかないのだ。喜びは、悲しみよりも、非人間的に見える振動にみちている。喜びは悲しみよりも、非主体的である。そして、ある種の音楽的状态は、主体も身体も退けて「器官なき身体」のようなものにならなければ成立しえない(…) (宇野 2020:317-318)

まさにここで記述された「女」は、極限的な差異の肯定と表現行為の一致を体現した存在として描かれる。「女」は、「世界、風景、音、光、物質と精神、感情と思考、内部と外部が、あらゆる否定性や固着や闘を超えて、通じ合い、交感し合い、共振し合い」、主客の区別をなくすことで、「喜び」を原理とした「器官なき身体」へと生成する。このとき、歌や踊りといった表現行為は、差

異の完全な肯定としての「器官なき身体」に対応する。

差異の感性論、表現行為、これらを結び付けるものは、ドゥルーズのスピノザ解釈に見いだされる身体論である。宇野は、『スピノザ——実践の哲学』に見られる以下の箇所に注目する。

ひとつの体 [論者注：身体] をスピノザはどのように規定するか。スピノザはこれを同時に二つの仕方で規定している。すなわち、一方ではひとつの体は、たとえそれがどんなに小さくとも、つねに無限数の微粒子をもって成り立っている。ひとつの体を、ひとつの体の個性性を規定しているのは、まず、こうした微粒子群のあいだの運動と静止、速さと遅さの複合関係なのである。他方また、ひとつの体は他の諸体を触発し、あるいはそれらによって触発される。ひとつの体をその個性性において規定しているのは、また、その体のもつこうした触発し、あるいは触発される力なのである。(SPP 165=宇野 2020:80)

身体は、それ自身で速さと遅さを持つ「無限数の微粒子」と、身体同士の触発し触発される「力」によって規定される。そしてこのような身体は、よい触発によって、力が増大しより多くの微粒子との構成に入り、反対にわるい触発によって、力が減少しより少ない微粒子との構成に入る⁽³⁾。先の例にしたがって述べるのであれば、「微粒子」が器官なき身体構成要素としての差異に対応し、他方で「力」がそのような「微粒子」にしたがってなされる表現行為に対応すると言えるだろう。

身体は、このような意味で、触発次第で変形する力と微粒子によって構成される「平面」としてとらえられることになる。宇野はこの「平面」を絶対性と相対性を兼ね備えたものと見る。

人格的な特徴を根こそぎにされた神という実体は、あらゆる様態(個体)を、触発の関係を通じてひとつに結合する平面のようなものにすぎない。人間に少しも似たところのない神-実体とは、全自然のことでしかない。

そのような平面は、自然と人間を貫通するあらゆる差異の広がりとして、あらかじめ存在するともいえるし、たえず構成され、再構成される実在の平面であるともいえる。また、新たなエティカを通じて、新たに構築すべき平面であるともいえる (宇野 2020:85)。

力と微粒子の「平面」は、「あらかじめ存在する」ような「神—実体」ないし「全自然」であると同時に、たえず触発によって「再構成」され、「新たに構築すべき」ものとされる。このような「平

面」のあり方こそ、宇野がまさに「流動」と呼ぶところのものである(宇野 2020:84)。宇野がドゥルーズ哲学に見いだす大枠とは、次のような個体観であると言えるだろう。それは、絶対性と相対性を兼ね備えた、触発にしたがって変化しうる「微粒子」と「力」の平面としての個体である。

このような個体観のうちに合理性の位置づけを見いだすことは難しい。むしろ、理性や知といったものは、触発を妨げるものとして「徹底的な批判」の対象と見なされる。

「喜び」の哲学は、いくつかの観念や体制に徹底的な批判を向けた。あらかじめある、とみなされ、生成と流動を閉め出し固定しようとする傾向をもつ、主体や理性や知や表象にいつも抵抗し、それらと一体の道徳、政治、権力の〈神聖同盟〉に対抗しようとした(宇野 2020:316-317)

「平面」としての個体の哲学は、「道徳、政治、権力の〈神聖同盟〉」に関わる合理性の排除と結びつく。『流動の哲学』の大部分は、合理性をこのようなネガティブな仕方であらわしているように思われる。しかし、宇野の記述のうちに、あえてポジティブな合理性の位置づけを見いだすことができるならば、どのようなものかを考えてみたい。

われわれは、二つの観点からの合理性についての示唆を見いだすことができると考える。第一に、合理性は超越的なものではなく内在的なものとして捉えられねばならない、というものである。われわれは先に「「感覚するのが難しいが、感覚するしかない」差異」の観点からそれ以外のものが捉えなおされるという宇野の解釈を確認した。このことが合理性に関しても適用されるのであれば、合理性は「道徳、政治、権力の〈神聖同盟〉」に関わる超越的なものとしてではなく、力と微粒子の「平面」と表現行為に関わる内在的なものとしてこそ思考されるべきであるということになる。われわれはここに、平面の縮小を妨げ、拡大を助けることで、豊かな表現活動の維持を可能にするプラグマティックな合理性の示唆を読み取ることができるだろう。われわれは後にこのような合理性が檜垣の解釈において、環境ないし習慣という定式化を与えられるのを見るだろう。

第二に、合理性は表現行為そのものにその対応物をもつ、というものである。宇野は著作の終盤で次のように述べる。

それほどまでにドゥルーズは、絶対や理性や真理によって、この世界を決定し、支配しようとした哲学者たちの超越的思考には、徹底して抵抗したのである。(…)けれども、決してそれはひとつの相対主義や犬儒主義を提起するためで

はなかった。彼は相対的なもの、多様なもの、断片的なものに、ある〈絶対〉を発見し、それに対応する理性も自由も発見している。この〈絶対〉は、変化、多様体、振動、出来事、差異、逸脱(脱線)の運動と、どこまでも共存し、それらに〈内在〉したのである(宇野 2020:310)

宇野のここでの議論は、平面において与えられる「相対的なもの、多様なもの、断片的なもの」に「ある〈絶対〉」が内在しており、この〈絶対〉に「理性」が対応するというものである。宇野は、〈絶対〉に関して、自身の「存在の一義性」に関する議論を念頭においていたに違いない(宇野 2020:133)⁽⁴⁾。宇野によれば、「存在」は「無限の差異」を含み「個物としてじかに表現される」ものである。われわれはこのことを踏まえて、平面における「表現される」ものの側面、すなわち力ないし表現行為が絶対的なものであると理解することができるだろう。要は、個体そのもののパースペクティブとしての「微粒子」は、触発にしたがって可変的なものであり相対的なものであるが、この「微粒子」に対応する力ないし表現行為は絶対的なものであり、このことに対応する「理性」があるということである。われわれは、このような合理性を作品の合理性と呼ぶことにしよう。確かにわれわれは『差異と反復』の第四章において、このような表現行為と諸理念の関係が問題にされていることを確認することができる⁽⁵⁾。

ただし、宇野の解釈がこれほどまでに近づいていたにもかかわらず、合理性の問題は宇野を触発しなかったようである。続編である『ドゥルーズ——群れと結晶』では、外部からの触発のモチーフが、ドゥルーズの哲学だけでなく他の思想家にも見いだされることを示す点に力点が置かれ、触発に内在するプラグマティックな合理性や〈絶対〉の合理性は追及されない。これに対して、われわれは、異なる仕方ではあるものの、檜垣の解釈のうちに、合理性の位置づけに関してより明示的な議論を見いだすことができると考える。

第二節

宇野と檜垣のドゥルーズ解釈にはさまざまな違いがある。例えば、解釈に関する方法論を挙げることができるだろう。宇野の著作は確かに多くの哲学的議論を参照するものの、それはドゥルーズの哲学の整合性を明らかにするためでも、新たな哲学の構築のためでもなく、あくまでも読者の触発を目指すためのものである⁽⁶⁾。これに対して、檜垣のドゥルーズ解釈は、ドゥルーズ哲学を現代ないし当時の思想的文脈のうちに位置づける点に特色をもつ。檜垣によれば、現代とは、「根拠」、「基盤」、「絶対的基準」といったものが失われた「解けない問い」の時代であり、ドゥルーズ

ズはこのような課題に、同時代の哲学者であるジャック・デリダとともに向き合ってきた哲学者である。デリダは情報の観点からこの問いに向き合い、ドゥルーズは生命の観点からこの問いに向き合ってきた（檜垣 2019:14-33）。宇野の方法論が、哲学を哲学の外に向けて開くことを目指すものであったのに対して、檜垣の方法論は現代的な課題を踏まえた新たな思想の構築を目指すものであったとすることができるだろう。

ところで、見いだされるドゥルーズ哲学の大枠から考えるのであれば、宇野と檜垣の解釈の最大の違いは自己についての議論を認めるかどうかであるように思われる。宇野の解釈において、個体は「触発」によって変形する力と微粒子の平面として捉えられていた。しかし、このような解釈は、個体の識別可能性に関して曖昧な点をもつように思われる。例えば、もし〈全自然〉との一体化する二つの個体があるとしたら、その二つはどのように区別されうるだろうか⁽⁷⁾。宇野が想定する「全自然」のうちには、無限の「全自然」を有限化し、個体の個性性を保証する自己の議論が不足していたのではないだろうか。檜垣の解釈は、宇野が提示した「平面」として個体の理解を踏まえつつ、この自己の問題に取り組んだものと見なすことができる。後に見るようにこのことは合理性により明確な位置づけを与えることを可能にする。われわれは、以下でこのような檜垣の議論を確認していこう。

檜垣のドゥルーズ解釈のキーワードは「卵」ということになるだろう。

生成とは何だろうか。未分化な卵が果たす生とは何だろうか。私はそれを、〈かたち〉なき場面に〈かたち〉が生じてくるような、つまり〈すがた〉なき世界から〈すがた〉が現れてくるような、力のみなきる場面であると描きたい。ドゥルーズにとって、まずもってリアルであることとは、卵から何かが生じてくるような、新しさの生成の現場なのである（檜垣 2019:44）。

「卵」とはすべてに先立って存在する「力のみなきる場面」であり、そこから〈かたち〉が浮かびあがる「新しい生成の現場」である。われわれは檜垣の述べる「卵」とは、すべてを生み出す自然のあり方を比喩的に示すものであり、人間、動物、その他の事物がそこで生成消滅する生命的な場であると理解することができる。檜垣は、この「卵」に内在する人間の「私」のあり方に注目して論じることで、ドゥルーズ哲学の特徴づけを試みていく⁽⁸⁾。

檜垣は、「卵」において「私」が生じることと「卵」が二側面へと分化することを等しいものととらえている。

私は無限に流れ [=卵] へとひらかれている。そこで私は流れに内在している。内在していることを自覚するとき、私は私をとりまくさまざまなもののあいだで、私の位置を限定し、かくして私が何であるかを知る。そのときに私とは、流れとしての世界に触れる現在 = 根拠のようなものではない。なぜならば、流れから切り出される私は、流れに先立って存在しはしないからだ。そして流れに内在するということ、その流れは、原理的に無限の広がりをもち、それゆえに未決定的なものでもあるからだ。

つまり、流れのなかに内在しながら自己の動きを決定していくこととは、無限に広がる世界の姿を俯瞰しながら、一種の跳躍のような賭けをなしていくことである。自己の視点という定点を消し去って流れに内在することそのものが、ただちに無限の俯瞰をなすのである（檜垣 2019:53-54）。

檜垣の解釈のポイントは二つである。1:「私」は、「卵」のうちで生成する「さまざまなもの」に常に伴われており、「私」のあり方は、この「さまざまなもの」との関係性を通して認識される。2: とはいえ、「私」は「さまざまなもの」に帰着されない「一種の跳躍のような賭け」としての側面も持っており、この側面は、「原理的に無限の広がり」をもつ「未決定なもの」 (= 「無限の俯瞰」) として「卵」に内在している。われわれは、前者の「さまざまなもの」を環境と呼び、この環境に帰着されない「原理的に無限の広がり」への内在として捉えられる側面を未決定性と呼ぶことにしよう⁽⁹⁾。「私」を、「卵」において区別される二つのあり方（環境、未決定性）と同一視することは、檜垣のドゥルーズ解釈の重要なモチーフである。

このような「私」の考え方を具体化するために、さらに別の観点から補足しておきたい。檜垣は『瞬間と永遠』の終章において、「原理的に無限の広がり」をもつ未決定性と同様のものを「儀礼」をモデルにして説明している（檜垣 2010:151-155）。檜垣のここでの記述は要約を拒むところがあるが、以下のようにまとめることができるだろう。パステューユ襲撃を祝う「連盟祭」は、過去にその起源を持つものであるが、この起源を遡及的に捏造することで新たに反復されるものである (= 未決定性)。さらに「連盟祭」は「創造的喜び」を伴っており、ここには文化的なものだけではなく「身体 = 質料的なもの」を含む「自然史的」なものも関わっている (= 無限の広がり)。これらのことからわれわれは、檜垣が述べる「私」の未決定性とは、「卵」という領野のうちに現れる自然史的な射程をもつ集団的行為の主体性のことであると見なすことができるだろう⁽¹⁰⁾。

ところで、このような「私」の未決定性は、差異の感性論にお

いて感覚されるものとしても論じられる。檜垣は、「私」の考え方を『差異と反復』の時間論に重ねて論じている。一方で環境は、純粹過去を条件とする「有機的—組織的連携」であり、行為の対象を構成する習慣の現在に対応する。他方で、未決定性は、環境を突き崩す「未来」ないし「第三の時間」に関わるものとされ、次のように述べられる。

だから、第三の時間で描かれる状況をいいあらわそうとするならば、それは、ひたすらに見ること、ひたすら感じることにしか表現できないだろう。与えられるものに対して、刺激—反応系（＝習慣化された働き）に収まるような、適切な応答をとれないこと。そこで真偽も内容も描けない新しさを、ただ受動的に被ること。未来という時間性を切りひらくこの場面は、まさに受苦という訳語すらあてはめうような、パッション＝情動の位相なのである。

しかし、引き裂かれた〈私〉、直接流れにさらされてある〈私〉とは、まさに生成を引き受ける個体そのもののことではないか。だからここで語られる情動とは、むしろ個体であることの内容を、積極的に表現すると考えるべきではないか（檜垣 2019:95）。

未決定性は、「ひたすらに見ること、ひたすら感じること」であり「新しさ」を「受動的に被ること」、「個体であることの内容」を積極的に表現する「情動」とされる。要は、「連盟祭」などの集団的行為の主体性は、理性や意志において現れるものではなく、一種の差異として感じられるものとされる。ここにおいて、檜垣の「私」の考え方は、宇野の解釈に見た差異の感性論に近づくことになる。

それでは、宇野と檜垣の解釈の違いはどこにあるのだろうか。宇野の解釈において、差異の感性論は、合理性を排除する「平面」の議論において捉えられていた。他方で、檜垣の解釈において、差異の感性論は、未決定性において成り立ち、合理性の位置は環境ないし習慣の側面に残されていた。檜垣の解釈は、「予見不可能な生成をひたすら肯定する」のではなく、差異の感性論と合理性の共存を明示した点において、宇野よりも進んだものと言えるだろう（檜垣 2019:99）。

檜垣はさらに二〇一九年版において増補された第二部において、『千のプラトール』におけるマイナーサイエンティストとしての「冶金術師」のあり方を論じるなかで、今度はこの未決定性の側面そのものに合理性が関わる可能性について示唆している。檜垣は、『千のプラトール』において、「私」の環境的な側面が「メジャーサイエンス」に、未決定性の側面が「マイナーサイエンス」にそ

れぞれ対応する点を指摘したあと、マイナーサイエンスの一事例としての冶金術師について、次のように述べる。

冶金術師たちの暗黙知は、鉱物があることこそにしたがう知として機能することになる。そうした秘密の知は、鉱物をみだしたあとでの、精錬の作業にも関連するだろう。純粹な金属の精錬や加工は、それ自身多くのテクノロジー的知を必要とする作業なのである（檜垣 2019:170）

ここで冶金術師の鉱物は、自然史的側面をもつ未決定性の象徴として捉えられる。そして、ここでの合理性は未決定性としての「純粹な金属の精錬や加工」に関わるものとして論じられている。要は、「未決定性」そのものを精錬するものとしての合理性の可能性がここで示唆されるのである。

檜垣の解釈に見いだされるこのような側面は、まさに第二の標語である「Be jellyfish!」に集約される（檜垣 2019:225）。ここでのクラゲとは、同じ世界に住むにも関わらず、「革命的連結」によって今ある人間とはまったく別の仕方環境に適応した生物の象徴である。人間は差異の感覚として与えられる集団的行為の主体性のうちで合理性を構築する生き物であるだけではない。人間は、感じられた主体性を習慣とは異なる別の合理性によって洗練させることで、「革命的連結」としてのまったく別の環境に生きるものとして生まれ変わることができるものとも見なされるのである。「私」の生成変化を進展させる契機としての合理性を示唆する点で、檜垣のドウルーズ解釈は興味深いものであると言えるだろう。

結論

われわれは、宇野と檜垣の二著が反合理主義的な差異の感性論をドウルーズ解釈の中心においていることを確認してきた。そのうえで宇野は、触発次第で変形する力と微粒子の「平面」として個体を捉えており、檜垣は、「卵」における未決定性と環境という二つの側面において「私」を捉えているのであった。

合理性に関して言えば、われわれは差異の感性論に関わる形で四つの合理性のあり方を確認してきた。第一に、差異の感性論が排除する「道徳、政治、権力の〈神聖同盟〉」に関わる合理性である。少し敷衍しておけば、ドウルーズは、前期の主著の一つ『差異と反復』のうちで、「これは机である」といった再認や指示を保証する同一的な合理性を、差異や反復を「道徳」に従属させるものとして批判しており、第一の合理性はこれに対応する。（DR 176）。しかし、現代社会はその維持のために不可欠なものとして言語的なものを保持していることは明らかであり、本稿はドゥ

ルーズにおけるポジティブな合理性のあり方を考えるために、宇野と檜垣の著作の細部に注目してきた。

第二の合理性は、差異の抑圧を試みる第一の合理性とは異なり、差異から出発してとらえられるプラグマティックな合理性である。これは、宇野の著作においては示唆に留まっていたが、檜垣の著作においては、環境ないし習慣の合理性として定式化されるものであった。ドゥルーズの哲学において、われわれの行為を可能にするこのような合理性は、つねに「感覚されることしかできないもの」としての差異に先立たれている。第二の合理性はそのような差異に内在する習慣の合理性である。

第三の合理性は、差異そのものを「精練」させる合理性である。感覚されることしかできない差異それ自身は、合理性によって完全に表現されないものであることは間違いない。しかし、この差異のあり方を変化させ、われわれに新たな環境を発見させる手段としての合理性が別に存在しうる。このような「秘密の知」は、すべての人にとって共通なプロセスとして提示することはできないであろうが、そこに何らかの形式を見いだすことは不可能ではないであろう。

第四の合理性は、〈絶対〉としての作品の合理性である。差異の感性論をその教説のうちに含むドゥルーズ哲学は、限りなく相対主義的な立場に近づくものである。しかし、われわれはまさにこの〈世界〉において、社会的な生活を営むのであり、その都度パースペクティブのうちに共通部分を持つものであることも間違いない。ドゥルーズは、そのような間主観性の契機をなす〈絶対〉を力ないし表現活動のうちに見いだしていた。さまざまな「平面」同士のコミュニケーションを可能にする〈絶対〉、ここにもある種の合理性が関わっていると考えることができるだろう。

このような四つの合理性をドゥルーズ解釈において共存させることはできるだろうか。このような問いは本稿の射程を大きく超えるものであるが、われわれはこのようなものを考えるために、少なくとも、次のように述べることができるのではないだろうか。それは、このような合理性の共存を考えるうえで、カント的な能力論的解釈格子は不十分ではないかというものである。ドゥルーズ哲学において、合理性は極めて多様な位置づけを持つことをわれわれは確認してきた。差異を従属させる合理性、差異に対して現れる合理性、差異そのものを变形させる合理性、差異そのものの可能性の保証する合理性、このような差異と合理性との不調和的調和は、一方で「崇高」などのカント的な美学的な概念において記述されるものとして理解されてきた。しかし、この点を強調することは、結局のところ差異と合理性の関係を解消不可能な感性と悟性の対立へと帰着させてしまい、ドゥルーズが合理性に与えた豊かな位置づけを檜垣が述べるように「予見不可能な生成をひたすら肯定する」凡庸なものにとどめてしまうのではないか。もし、このような合理性の共存が論じうるものであれば、カントの能力論的な語彙ではなく、ライブニッツの時間論的な語彙によるのではないか。

また本稿では十分に検討できなかったが、『差異と反復』には、再認や指示を逃れ、一種の相互関係として論じられる構造的な合理性の論点がある⁽¹¹⁾。この合理性は、「問題」「諸理念」「多様体」とも言い換えられ、「微分的で発生的な諸要素」としてドゥルーズのシステム論と密接にかかわるものである。こういった論点との関わりを含め、ドゥルーズ哲学におけるさまざまな合理性の共存を論じることは今後の課題としたい。

参考文献

※ドゥルーズ著作への参照は、以下の略号と頁数を示す。既訳がある場合は参照したが訳文が異なるものもある。またドゥルーズの講義の書き起こしに関しては、リシャール・ピナス(Richard Pinhas)のサイト (Web Deleuze, webdeleuze.com) およびパリ第八大学のサイト(La Voix de Gilles Deleuze, www2.univ-paris8.fr/Deleuze)、ドゥルーズセミナーズプロジェクトのサイト(The Deleuze Seminars, https://deleuze.cla.purdue.edu/)で入手できる。本稿では先例にしたがって講義が行われた日付によって参照を行う。例：(15 Apr 1980)

Différence et répétition, PUF, 1968 (DR)

Spinoza: philosophie pratique, Minuit, 1981.(SPP)

宇野邦一(2012). 『ドゥルーズ：群れと結晶』, 河出書房新社.

—— (2020) [2001]. 『ドゥルーズ 流動の哲学 [増補改訂]』, 講談社学術文庫.

小泉義之(2015). 『ドゥルーズの哲学：生命・自然・未来のために』, 講談社学術文庫.

檜垣立哉(2010). 『瞬間と永遠：ジル・ドゥルーズの時間論』, 岩波書店

—— (2019) [2002]. 『ドゥルーズ 解けない問いを生きる〔増補新版〕』, ちくま学芸文庫.

注

1. 本稿では両著作ともに新しい版を参照する。『ドゥルーズ 流動の哲学〔増補改訂〕』は、〈新実在論〉のノートなど「全体として一割くらい加筆」されたものの、その論旨に大きな変更があるとは言えない。『ドゥルーズ 解けない問いを生きる〔増補新版〕』は、二〇〇二年の版にはなかった第二部が追記され、以下でも確認するが、合理性に関して深まりが見いだせるように思われる。
2. この箇所の議論には、内在の観点からの合理性の位置づけを考える際に再度戻ることになる。また『シネマ』に関する議論においても同種の言い方を見いだすことができる。「たぶんドゥルーズが続けてきた哲学的思考そのものに、何か映画的なもの、映画のイメージに本質的に対応するような何かが含まれていた。言語によって、言語として、概念や知を構成する哲学の思考が、いつも非言語（身体、物、物質、イメージ、力）と交錯し、たえず知の外の動き（感情、欲望、無意識、知覚）に直面していることに、ドゥルーズの哲学はいつでも敏感であった」（宇野 2020:258）。
3. 「微粒子」と「力」の関係のとらえ方に関しては、明確に整理されていないものの、「力が損なわれ、微粒子の構成が解体されて、より不完全になるのは「悪い」ことである」との記述を参考にした（宇野 2020:83）。
4. 「スコトゥスもスピノザも「存在の一義性」について語っているが、決してそれは存在があらかじめ統一性や同一性をそなえていることをいうためでない。むしろ存在が類や種への分割を受けつけず、ただ無限の差異を含み、個物としてじかに表現される（同一性にしがたって表象されるのではない）ということを行うために、「一義性」というのだ。ノマド的な配分の哲学にとっては、世界はひとつであり、同時に無限の差異であり、そのあいだに表象や同一性などはなくていいのだ」（宇野 2020:133）。
5. 「一般に作品はつねに理念的物体であり、それ自身において、添加の理念的物体である。作品は命令から生まれた問題である。問題が問題として漸進的にますます規定されればされるほど、作品は一度でますます完全で全面的なものになる。したがって、作品の作者はまさに《理念》の操作者と呼ばれる」（DR 256-257）
6. 宇野のこのような態度を象徴するのは例えば次の箇所である。「要するに、高度な専門知識をどんなに寄せ集めても、それだけでは、この本〔『差異と反復』〕の核心に近づけないだろう。哲学の内部に深く分け入るのは、結局それを外部に向けて切り開くためである。精密な議論は、あくまでもその大胆なモチーフのためである」（宇野 2020:126）。
7. すべての主体は「世界の全体性」を表現する。それならば「何がある主体を別の主体と区別するのか」（15 Apr 1980）。このような問いはまさにドゥルーズが自身のライプニッツに解釈において立てていた問いである。ドゥルーズの答えは「観点（point de vue）」こそがそのような区別を可能にするというものである。以下で見る檜垣の未決定性に関する議論は、この「観点」の議論に対応しているように思われる。
8. このことを逆に言えば、檜垣のドゥルーズ解釈は人間以外の個体の生成が、どのようにして以下のような未決定性と環境のカテゴリーのもとで考察されるかという議論を完全に省略したものと言えるだろう。この点に関しては、一九九〇年代の自然科学的知見を用いて、ドゥルーズ自然哲学の再現を試みた小泉(2015)のドゥルーズ解釈が大いに参考になる。
9. さまざまな仕方でパラフレーズされるなかで、われわれは論述のために環境と未決定性という簡潔な表現を選んだ。「環境」という言葉は、檜垣がそれほど多くはないもの実際に用いているものであり、未決定性は多用される「未決定なもの」という表現に由来する。
10. 檜垣は、『瞬間と永遠』においてこのような主体性を「瞬間と永遠の結びつき」としての「自然の自己触発」と呼んでいる（檜垣 2010:155）。そして「瞬間」と「永遠」はまさにこのような自然史的な射程をもつ集団的行為の主体性において結びつくものとされる。

11. 本稿では、檜垣が「卵」のうちに見いだす「問題」の論点を展開することができなかった（檜垣 2019:65-87）。「問題」は習慣とは異なる仕方で「卵」において創造されるものであり、生命の生成に関わる「歴史」や未決定性からの環境の発生に関わるものと見なされる。ここに見いだされる構造的な合理性に関してはまた別の機会に論じたい。